

## 二河白道（にがびやくどう）の譬（たと）え

―善導大師の教えから―

今から千二百年ほど前、中国唐の時代、私たち浄

土門徒（じようどもんと）が、高祖（こうそ）と仰



（二河白道の図）

（あお）ぐ善導大師は、浄土門が所依（しよえ・より

所とする）の経典とする、『無量寿経（むりようじゅき

よう）』・『観無量寿経（かんむりようじゅきよう）』・『阿

弥陀経（あみだきよう）』のうち、『観無量寿経』を注

釈（ちゆうしゃく）された『観経疏（かんぎようのしよ）』

という書物の中に示されたものであります。この

善導大師は、浄土宗の開祖（かいそ）法然上人が、

中国と日本という場所の隔（へだ）たり、五百年と

言う時の違いを超えて、師弟の交（まじ）わりをも

たれた高僧であります。 私たちもこの「譬え」に

親しむことによって、善導大師とよりお近づきにな

らせていただき、同時に凡夫（ぼんぶ）の救われて

いく浄土のみ教えを聴聞(ちようもん・聞くこと)することができるようになると思っています。

前頁の絵図が「二河白道の譬え」の絵図です。お寺で見かけられた方もいらつしやると思っています。

先ず絵図の状況につき概説致しましょう。

ここに一人の旅人がいて、東から西に向かつて旅をしていました。しばらくいくと突然二つの河に突き当たりました。一つは火の河で左南側に、もう一つは水の河で右北側にあります。その中間に幅四、五寸(十二センチ〜十五センチ程)程の一筋(ひとすじ)の白道(びやくどう)が走っています。東岸から西岸までの河の幅と同じく百歩ほどの道であります。

右手の水の河からは波浪が押し寄せ、その道を洗うようであり。左手の火の河の焰(ほのお)も、道上的ものを焼き尽くさんばかりの勢いで道を覆(おお)い隠(かく)しています。

この旅人はただ独(ひとり)、トボトボとこの近くまで歩いてきたのですが、突如、後ろから群賊悪獣(ぐんぞくあくじゅう・多数の賊と害を与える獣)が襲いかかって殺されそうになり、走るように西に逃れて来て、この二つの河にぶつかったのです。

「さあ、大変なことになった。この河は南北に果てしなく、真ん中に一筋の白道はあるものの、まことに狭すぎる。向う岸へ早く渡りたいが、どうすれば

よいのだろう。私の命も、もうこれまでらしい。後へ退（しりぞ）こうとすれば、群賊悪獣が追い迫（せま）ってきているし、河の堤に沿って南北に避（さ）けようとすれば、そこにも悪獣・毒虫が待ち構えている様子。この道を西に向かえば、おそらくは二河に墮（お）ちてしまうだろう」

前後左右、追い詰められた恐怖は、まさに頂点に達し、言葉で表現できないものではありません。でも、その旅人は思いました。

「行っても戻っても死、



左右へ回つても死。どのみち死から免（まぬ）がないならば、いつその白道を進んでみよう。そうだ、きつと渡り抜けるだろう」

そう覚悟を決（き）めたとき、東の岸に人の声がして、

「旅人よ、心に深く決めてこの道を歩み渡りなさい、決して死ぬようなことはない。早くゆきなさい」と勧める声。又、渡りだそうと思うまもなく、今度は西岸の向うから、喚（よ）ぶ声が聞こえてまいりました。

「その白道を一心に渡って早くこちらへ来なさい。水火の難を怯（おそ）れることはない。私が汝（な

んじ)をよく護(まも)ってあげよう」

「行きなさい」「来なさい」の声に励まされて、今は疑いも怯もなく、一筋の白道を渡り出します。

十五歩から二十歩ほど進んだ頃、東岸の群賊から

「戻って来い、戻って来い。その道は難路、決して渡りきれぬものではない。自分たちは誓ってお前に悪心を持っているのではない。安心して戻って来い」と、声がかかりました。

しかし、この旅人はもう振り返りませんでした。「行きなさい」「来なさい」の言葉を信じて迷うことなく、心に決めた白道を、前進しました。そしてしばらくして、無事西岸に着くことができたのです。

そこは諸々(もろもろ)の苦難のない世界であり、善(よ)き友とあい見、あい語る(こと)のできる慶(よ)ろこびの国でありました。

### 一、独(ひと)り旅行(たびゆ)く

この譬(たと)えは、私たち人間の心や生活、そして浄土往生(しょうどおうじょう)・お浄土にゆき生まれること(の姿を現(あらわ)したものです。誰もいない曠野(こうや)・広々とした野原(を西に向って独り進むのは、他人ではなくまぎれもなく自分自身の姿です。人間は皆独り生れ、各々人生を送って、やがて独り死んで行くのであります。裸で生れてきた私は死ぬときも裸です。

「妻子眷属（さいしけんぞく・妻子を初め一族郎党のこと）は家にあれども伴わず、七珍万宝（しっちんまんぼう・七珍へ金・銀・ルリ・ハリ・シヤコ・珊瑚とある宝物）は蔵に満てれども益もなし」

『登山状』

これさえあればと頼りに思ってきたものが、実はどれも頼りになるものはありません。そして又、一寸

先は闇と言うとおり、明日のことすらよくわからな

いのが私たちの人生ではありませんか。まさしく地図を持たない、予備知識のない、日程・コースを決めら



れない旅であります。

この世に生を受けてから今日までの地図は、夫々の履歴書のように、自身の歩んできた山・坂・川の楽しかったこと苦しかったことを、過ぎ去った人生の地図としては記せるでしょう。しかし、明日から先の地図として、自分の行く道、一寸先の生きざまを書き込める人はいない筈であります。

明日も会社へ行こう、今度の正月は故郷へ帰ろう、これらはあくまで予定にすぎません。近頃は楽な道ばかりと安心していても、明日には山にぶつかり谷に転落するやらわからないのが私の人生であります。勝手な予定を人生の地図に書き込み、こんな

筈（はず）でなかったと残念がったり、悔しがったりするものです。

禍福（かふく・幸せと不幸せ）は糾（あざな）える縄の如し　と言われるように、この世の幸・不幸は背中合わせ、髪を表裏のようで喜びが悲しみが変わってしまうことはよくあることです。

子生れて母危うし　鑑（きょう）積んで盗窺う  
何の喜びか　憂いにあらむらんや

これは『菜根譚（さいこんたん）』の一説ですが、子どもが生れておめでたい時に、母親が命を落とす場合もあり、鑑（穴の開いた銭を紐で通して輪にしたもの）を積むほどの金持ちになれば、一夜のうちに盗

まれる悲劇も起こります。「憂世（うきよ）」とはよく言ったもので、喜びが一瞬に憂いに変わる、ちよほど糾える縄、祝儀の紅白の水引と不祝儀の白黒の水引を共により合わせたような、予想もしない辛い目に遭（あ）うのであります。

地図のない私たちの人生ですから、明日以後一切不明、暗闇の中　手探りの人生ながら、はつきり判っていることが一つあります。

それは必ず「老・病・死」が確実に来るということです。この世は貧富・賢愚・男女など差別の世界と言われていますが、是だけは平等に訪れます。どんな権力者・大富豪でも若さは買い戻せない。病

人の姿は、他人事（ひとごと）ではなく、やがては自身の姿・お手本です。平均寿命がいくら延びてもこの方は他人事、自身の命に明日の保障はない。是を都合よく解釈し、病気には罹らないとか、平均寿命まで後何十年と錯覚して、唯今の一息一息の尊さ、自身の生命のありがたさに気付かないのは、なんとしてももったいないことです。

この辺（あたり）りを

善導大師は『往生礼讃

（おうじょうらいさん）』で

人は営みしげくして

日ごと夜ごとにその命



滅び去るをも覚り得ず

風にゆらるる灯火の 消えんとする如くなり

住み難くして六道を 行えもわかずさまよえり

未だ解脱し得ざる身は

あわれ 苦界を出で難し （大木惇夫訳）

と申されています。

そして、中年を過ぎて初老を迎える年齢となり、

越（こ）し方（かた）行く末を想い、ふと気が付いた

とき、云いような寂しき、人生の孤独に、改め

て真実の人生とは何か を問い直した経験のある

方もたくさんいらっしゃるのではないのでしょうか。

二、わが業（ごう）の深さ

「二河白道の譬え」は、冒頭に掲げたように、今では判りやすい絵図として掛軸になっており、夫々の菩提寺でごらんになった方もいらつしやると思われます。しばらくは冒頭の絵図を時々参照してください。

さて西への流離（さすら）いの一人旅であります。が、東の岸は娑婆（しゃば）の世界、即ち、この世・私たちの人生そのものであり、西方、彼の岸はみ仏の在（おわ）す国・お浄土（じょうど）であります。西へ向かうとか、旅するということは、私たちの心のどこかで理想の世界・心のふるさとを求めているからで、親のおられるところは、私たちにとって安

心して帰れるところであり、その親許（おやもと・ほとけさまの許）が年とともに懐かしく恋しく思えてくるものです。前方に二つの河がみえ、一つは火の河、これは腹立ちで怒りの相（すがた）であり、もう一つの水の河、これは愛着で欲深の相であります。仏教でいう「智慧（ちえ）」というのは、学校で教わるような知識や理屈ではなく、真理をさとり、仏道を正しく生活に生かす力であります。二河の中間にある四、五寸ほどの白道は、往生を願う心に譬えたものです。旅人の後方東の岸に甲冑（かっちゅう・よろい兜）に身を固め槍、刀を持った数人の武士が描かれています。これは六根（ろっ



心(こん)に譬えられ、眼(げん)・耳(に)・鼻(び)・舌(ぜつ)・身(しん)・意(い)の六つです。

この六根が私たちを苦しめます。よく口は禍の元といいますが、口だけではなく眼も耳も体なども同様で、信仰上の登山では「六根清浄(ろっこんしょうじよう)」と唱え、六根からくる一切の迷いを断ち切り、心身を清らかにしようと願います。ここで判りのように、私たちの日常は六根不浄の生活である、といわねばならないでしょう。



阿弥陀如来の尊容を拝むことのできる眼を持ちながら、また、在り難いみ教えを聞く耳を与えられ、南無阿弥陀仏とお念仏を称(とな)える口をもちながら、それとは気付かない毎日でした。ほんの今、

水・火の二河が見え、数人の群賊に襲われたようにおもったのですが、実は今日まで気付かなかっただけで、この心身は遠い昔から、水に溺(おぼ)れ火に焼かれ、自身の中に群賊を養っていたのであります。眼で見えるもの、耳で聞くこと、鼻で嗅(か)ぎ、舌で味わい、口でいうこと、身(からだ)で感じ意(こころ)で考えることの全てが欲望となり、それが満たされないうとき、瞋(しん)・自分の考えに違

背したことが起こった時憎み憤り、心身を鎮められない心作用を言う。煩惱のことに変わるのが凡夫（ぼんぶ）であります

仏教では又、身・口（く）・意の三業（さんごう）

といつて、それぞれが悪の原因となつて苦を招きます。身業に三種、口業に四種、意業に三種計十種

の悪因があるので十悪業といわれ、更に、ご存知の方も多いと思いますが、除夜の鐘の打数に関係する百人の煩惱（ぼんのう）も十悪業を細分したものです。序（ついで）に、あるお経に「一人一日の中に八億四千の念あり、念々の中の所作みなこれ三途（さんず）（さんず・地獄世界の入り口に三途の川がある）の業な

り」とありますが、人間はそれほど多くの地獄（輪廻転生（りんねてんしょう）する六つの世界の内最下位の世界）行きの種を蒔いているということでありましょう。

煩惱は人間の悪の根源（こんげん・おおもとの意）であります。思うほどに罪業深いこの身と云わざるを得ません。

六道輪廻（ろくどうりんね）ということばがあります。まさにそのとおり、地獄・餓鬼・畜生・修羅（しゅら）・人間・天上（てんじょう）の迷いの世界を堂々廻（どうどうめぐり）りしているだけです。どうしたら救（すく）われるのでしょうか。

善導大師は

「決定(けつじょう)して深く信ず、自身は現にこれ

罪悪生死(しょうじ)の凡夫、曠劫(こうこう)・遠い

過去から遙かな未来までの極めて長い時間の(こと)より

この方、常に没(もつ)し常に流転(るてん)して、

出離(しゅつり)の縁あることなし」

『観経疏』散善義(かんぎょうしよ)さんぜんぎ

この救われようのない罪悪の凡夫である という敵

(きび)しい内省と自覚。

更に大師は、『往生礼讃』

(大木惇夫訳)に

煩惱深く底いなく



苦を渡る船 まだ発(た)たず

など眠りをば むさぼるや

と嘆かれ、心を西(阿弥陀如来が創られた極楽浄土のこと)に向けられたのであります。

偉大なる高僧にしてこのとおりですから、我々凡

夫が水・火の二河を渡るのは容易ではありません。

その河は、「深くして底いなく、辺(ほとり)は涯も

ない」河であります。

「火の河」は瞋(いかり)のこころです。瞋は、

古来より違境(いきよう)・自己の心に反し不快感を得、

苦痛を起(こ)させるような対象を云う。順境(の対)におい

て起こる」と訳されています。つまり自分の心

悩がないわけではありません。

に違うものを怒り恨んだり、心に叶わない相手に対しての憤りであり、相手の行為につき善・悪は関係なく憎しみ妬みます。全てを焼き尽くす火に譬えられています。 瞋恚（しんに）の炎（ほむら）と云う

「水の河」は貪（むさぼ）りの心です。これは瞋りの反対で順境（じゅんきょう）において起こるといわれています。 順とは従う、さからわない、つまり欲しいと思う物を貪り求め、自分の情に適（かな

言葉があります。怒りの激しさで身を焼く姿をいうのであります。一河白道の絵図では、必ず炎の状態で表されています。今腹が立っている、残念だと不平をぶちまけている、逆上すれば人殺しもしかねない、というような心の作用をしめたもので、人間は皆心底にいつ噴火するかわからないマグマを持っています。従って、今怒っていないなくても、瞋煩

うものを受け入れて、それに執着（しゅうちやく）・深く心にかけて思いこみ、忘れられないこと）することです。従って、自分で気に入った物は、理に合わなくても力のある者は、その威光にまかせて奪い取ってしまいます。 水に喩えるのは貪水（どんすい）と

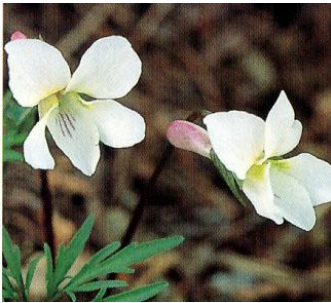
いて、水がものを吸引する力を有し、それがあ

上にも更に欲しい心を起こす（楞嚴經よりようこんき

よう)からで、また、「欲に溺(おぼ)れる」と言われるように、水の怖(こわ)さに譬(たと)えたものであります。この絵図では炎と同じく波立つ相で描かれています。

います。欲の心は誰もが持ち合わせていますが、表面に出たとき波浪となつて、心を騒がせ次第に汚染してきます。ある時は財欲となり、名誉欲となり、色欲ともなつて、私たちはその波間にもまれ、ながされるのであります。

ます。我々は常に六根の罪障に縛られ、貪瞋煩惱の鎖に繋がれた俛(ひた)の人生を送るならば、私たちは



真に仏には遠い存在と言わねばならないでしょう。

### 三、二尊(にそん・釈迦、弥陀各如来のこと)の

#### おみちびき

白道の長さ百歩とは、人の一生・百年の寿命のたとえ。この道は自分の生命ある内に渡りきらねばならない道。その決断が今に迫っている。しかし道は狭く、燃えさかる炎と逆巻く波が押し寄せ、とても渡れそうにない。これは貪瞋煩惱に対する恐れと、自身のなさのあらわれ。引き返そうとすれば六根の群賊が身をなやます。河に沿って逃れようとすれば、悪獣が待ち構えている。これは悪友の類いで、善事の妨げをし、懶(なま)け心を起(こ)させる。

進退窮まれば、どんなに優柔（ゆうじゅう・決断力に欠けること）な者でも決断せざるを得ない。

決断とはこの場合択（えら）びとることで、この白道を渡るしかないということ、換言すれば、あれもよいし、これもよい、どちらにしよう、と迷い取るのではなく、お念仏一筋に進む以外にない、と心に決定すること。一心になれば道は自（おの・自然に）ずからかれます。

お念仏の白道を我が生涯の道と決めたとき、今まで見えなかったものが見え、今日まで聞こえなかったみ仏のみ教えが、聞こえてきます。

み仏と結縁（けちえん・因縁を結ぶという意味、これ

に二つあって一つは、仏・菩薩が衆生を濟度するため、衆生に対して結ぶ場合、ともう一つは、衆生が仏道修行の為に、仏・法・僧に対して結ぶ場合）を得て、心を西方に廻し向けた私の後ろ（東方）からお釈迦さまが「この白道を早く渡り行きなさい」と勧められ、行く手の彼岸・西方の極楽浄土からは、阿弥陀如来が、「水・火を恐れず早く来なさい」と喚（よ）ばれる声が明らかに聞こえてきます。

思えばお釈迦さまは、今から二千五百年前インドに生まれ、苦行の後悟りを開かれ、広く大衆の為に浄土のみ教えを示され、時は移りましたが、その教え（法門）は残っていて、信仰の眼には今もお釈迦様を拝み、信心の耳にはそのみ教えを聞くことが出

来得るのであります。

又、阿弥陀如来も、法蔵菩薩（ほうぞうぼさつ・修行時代〈因位<sup>①</sup>いんにの時代〉の菩薩名）の昔からのご本願（ほんがん）を成就されて、お念仏を称える人を救い取すにはおかぬ、と言う喚びかけであり、お迎えであります。

よぶは弥陀

行けよは釈迦に

中はわれ

おされひかれて

まいる極楽



四、**お念仏の救い**

善導大師は、「今二尊の教えに乗じて広く浄土の

門を開かん」『観経疏』玄義分」と、私たちに教えのお取次ぎをして下さいました。この浄土のみ教えは、凡夫がお念仏を称えて往生すること（これを愚鈍へぐどんの念仏という）であります。学問をして念仏

の意味を理解して称える念仏ではなく、心の中で仏を念ずるのみでもなく、専ら真実の心で弥陀如来の救いの力（本願）を深く信じて、浄土へ往生することを願ってお念仏を口に称え（他力本願口称念仏という）る、これ以外に格別のことはないものであって、智者であるが故に高慢（こうまん・おごりたかぶり、人をばかにするさま）になったり、どれ程お念仏を沢

山称えても、それが自力（じりき。他力の対）に通じる（弥陀の教え口称念仏は他力本願を意とする）ようではないけません。

又、私たちは罪業深き凡夫であります。その煩惱に打ち勝ち、身も心も清らかになって称えなさい、というお念仏でもないのです。たとえ本願念仏を喜ぶ身になったとしても、貪瞋煩惱の波や炎は変わりなく白道に押し寄せますが、その罪障の俣に唯（ただ）一向にお念仏の道を行くのであります。昔から慣れ馴染（したし）んできた貪・瞋の身をも厭（いと）わず摂取（せつしゅ・おさめとる）してくださるみ仏の光明につつまれ、弥陀の本願に任せて行

くよりほかに、救われる道はありません。ただ心の善悪をも願（かえり）みず、罪の重き軽きをも考えず、

心に往生しようと願って、口に南無阿弥陀仏と称えるばかりであります。念仏生活の合言葉に、「いつも、どこでも、だれでも」とありますが、いつでもよろしいのなら、今日は忙しいから明日となえましょう、どこでもよろしいというけど、やはりお仏壇の前でないとね、誰でもよろしいのか、家内が熱心な信仰家だから、代わりに称えて貰おう、というような誤解はいけません。念仏は、一人一人、時は今、処はここ、を二河にかかる白道と心得て励んでください。